

統合コース特別プログラムからみるドイツにおける今後の移民政策
— 難民出身者が受講する女性向け・アルファベットコースについての報告 —

The Significance of ‘Special’ Integration Courses in Germany:

The Courses for Women and those without Sufficient Knowledge of the Latin Alphabet, Often Taken by Refugees

佐野 敦子（東京大学大学院 新領域創成科学研究科 技術補佐員）

Atsuko SANŌ (Assistant Technical Staff, Graduate School of Frontier Sciences, The University of Tokyo)

キーワード：ドイツ 統合コース 難民

1. 報告の目的

本発表では、ドイツにおいて新規移民に義務付けられる「統合コース」(Integrationskurs)のうち、特別形態として設置され、約 20%の受講者(2014 年時点の総計)が履修した女性向けコース、およびアルファベットコースの状況を報告する。これらのコースには、通学経験がない受講者、EU 外からの移住でラテン系のアルファベットに不慣れた受講者が含まれる。現在ドイツに押し寄せる難民は、難民認定後にこのようなコースで学ぶ可能性が高く、今後ますます受講者が増えるのが予想できる政策である。今回の発表ではこのコースの報告を通し、移民の「多様性」がますます広がり、移民政策にドイツ語の教育が重要になっているドイツの現状を考察する。

2. 問題の所在

2000 年代に入ってから「移民受入国」を自認したドイツは、国籍法・移民法を相次いで改正、移民の統合政策に積極的に取り組んでいる。その政策の重要な施策としてあげられるのが「統合コース」である。新規移民に義務付けられるこのコースは、長期的にドイツに滞在する見込みの外国人が、ドイツ語の習得と並行し、ドイツ社会の「基本知識」を身に着けることを目標としている。すでにドイツに居住している外国人・移民も受講可能であり、「統合のキャッチアップ」(nachholende Integration)への効果も期待されている。

だがドイツに住む外国人・移民はさまざまなバックグラウンドをもつ。ドイツ語のレベルのみならず、学歴や文化的・宗教的背景など、コースの受講者の状況は一様でない。そのような受講者の「多様性」に対応するため、「統合コース」には受講時間が違う特別形態のコース(以下、「特別コース」と称す)がある。受講者の約 80%は 645 時間の一般コースを受講しているが、それ以外は「特別コース」のうち 945 時間で構成されるプログラムの受講者であり、そのほとんどは女性(+保護者向け)コースかアルファベットコースで学んでいる。とくにアルファベットコースは、EU 外からの移民が多く、難民出身者も多くみられる。

発表者は、外国人率約 18% (2013 年現在)のデュッセルドルフ市で行われているこの 2 つのコースを、折に触れ、2011 年から見学、および授業アシスタントとして参加している。今回の報告は 4 年間の状況を振り返り、それをもとにドイツの移民統合と今後の展開について考察するものである。

これまでドイツの移民統合については多数の報告がある。代表的なものをあげると、内閣府のディスカッションペーパーとしてまとめられた丸尾の報告(丸尾、2007)、言語政策の視点からの科研調査(松岡、2007)などである。だが、これらはドイツの連邦政府の政策分析が中心となり、通学経験のない女性や、ドイツ語の読み書きを一から学ぶような受講者を対象とする「特別コース」に対する具体的な状況報告や言及はあまりみられない。

本発表でこれらの「特別コース」に注目する理由は 3 つある。

ひとつは、この「特別コース」には難民出身の受講者がおり、今後重要性を増すのは必至だからである。既知のようにドイツにはここ数年、主にイスラム圏の混乱を要因とした難民の流入が激増している。彼らは難民として正式に滞在許可が受け入れられると、アラビア語圏からやってきたアルファベットに慣れ親しんでいない移住者、もしくは学校にいったことがない移住者として特別コースを受講する可能性が高い。実際、発表者はこれまでこのコースを訪問した際、多くのシリアやイラン、アフガニスタン出身の受講生に出会っている。

ふたつめに今回の調査地における移民・外国人率の高さである。発表者が定期的に参与観察しているコースはデュッセルドルフ市で実施されている。同市は最大の受講者、およびコースの提供がされているノルドラインヴェストファーレン州の州都である。それゆえ、コースにはさまざまな文化的・宗教的な背景をもつ受講者が集まる。そして、この特別コースの現状や抱える課題が顕著に浮き出ているといえる。

みつめにドイツは連邦政府ではなく州政府が教育の主導権を握る「文化高権」の国だからである。すなわち、「統合コース」は連邦政府の移民難民局が統括しているが、実際に運営・実施しているのは現地の機関である。主には、民衆大学などの成人教育機関、カリタス他の福祉団体、支援団体があげられる。連邦政府の移民難民局がコースのカリキュラムや教師の養成・資格等の制度整備、受講者数や修了率など統計を管理しているとはいえ、実際のコースの状況はそれからだけではみえづらい。今回の発表で具体的にその実態を伝える予定である。

3. 研究の方法

デュッセルドルフ市で開講されている移民を対象とした統合コースのうち、特別形態として設置された女性コースおよびアルファベットコースを訪問、2011年からおよそ1年に1回の割合で見学、もしくは授業アシスタントとして参加し、観察を続ける。授業や参加者の出身国や年代、生徒が受講している様子、教師が指導上注意していることや一般的なドイツ語コースとの違いなどを記録し、前年までとの比較や、移民難民局からの統計資料を鑑みながら、考察をすすめている。

2011年12月に最初に女性コースを見学、当時はボン大学に留学中であったため、滞在中に学期末のパーティーや、講師が受講生を招いて行う誕生日パーティーなどプライベートな集まりの機会も度々利用、受講者やその家族との交流を深めた。帰国後は毎年8月—9月の間に渡独する機会をつくり、滞在中に見学可能なコースを訪問、2011年にインタビューした受講者のその後の様子もできる範囲で聞き取っている。以下のこれまでの訪問の概要を記す。

・2011年—2012年 女性コース

市内の小学校の一室で開催、その小学校に子供が通っている母親が主な受講者。パイロットプロジェクトとして民衆大学で開講された。発表者が当時ドイツに留学中だったため、学期末のパーティーや、講師の誕生日などプライベートな機会も利用し、受講生の背景やその家族の状況なども聞きだした。

・2013年 女性コース 2011年の際に訪問した女性コースを再び訪問

・2014年 女性コース アルファベットコース 女性コースの後、講師が担当していたアルファベットコース見学

・2015年 女性コース アルファベットコース 講師の家に宿泊、両コースとも授業アシスタントとして参加。

【参考文献】(リンクはいずれも2015/10/13 取得)

Bundesamt für Migration und Flüchtlinge, 2013, *Das Bundesamt in Zahlen 2014* (連邦移民難民局 2014年統計), Nürnberg: Bundesamt für Migration und Flüchtlinge

<https://www.bamf.de/SharedDocs/Anlagen/DE/Publikationen/Broschueren/bundesamt-in-zahlen-2014.pdf>

佐藤裕子, 2010, 「移民からドイツ人へ—ドイツ帰化テスト導入をめぐる」 浜本隆志, 平井昌也 (編著) 『ドイツのマイノリティー人種・民族、社会的差別の実態』 111-146, 明石書房

佐野敦子 (2014) 「ドイツの成人教育からみる『統合』と国民アイデンティティの形成」

立教大学 博士学位論文 <http://doi.org/10.14992/00010608>

松岡洋子, 2008 「ドイツの改定統合コースについて」 『移住者と受入住民の多文化的統合を視座とした共通言語教育』 日本学術振興会平成16年度—19年度科学研究費補助金 基盤研究 (B) (1) 研究成果報告書

http://www.flae.h.kyoto-u.ac.jp/~nishiyama/IwateKaken2008/38_The%20new%20ordinance%20on%20Integration%20Course1.pdf

丸尾眞 (2007) 「ドイツ移民法における統合コースの現状及び課題」 内閣府経済社会総合研究所

http://www.esri.go.jp/jp/archive/e_dis/e_dis189/e_dis189.html